

資料 1 松ヶ崎村年表

平安時代 794~	弘仁 元年(810) 嵯峨天皇が松ヶ崎川で禊祓を行う 正歴 3年(992) 中納言源保光 松ヶ崎寺建立 永久 元年(1113) 松崎陵(陵戸田)が十四里に散在する 知承 2年(1178) 松ヶ崎が7か所霊所のひとつとして数えられ、泰山府君祭が行われる	
鎌倉時代 1185~	寛喜 2年(1230) 松ヶ崎では、麦作が盛んとなる 松ヶ崎北、南氷室田が注進される	日蓮宗に全村改宗(1306) “妙”の送り火の はじまりと言われている
室町時代 1338~	観応 2年(1351) 足利軍と新田義貞の戦いで松ヶ崎が兵火を受ける 寛正 3年(1463) 寛正の土一揆の根拠地として松ヶ崎が放火される 天文 5年(1536) 天文法華の乱で松ヶ崎城が落城 天文16年(1547) 松崎惣中が現れる	(1600年代) “法”の送り火が はじまる
安土桃山時代 1575~	元禄 2年(1689) 村の座役について取り決める	高野川の 水争い 太田井堰 1672~ 1844頃
江戸時代 1603~	寛保 4年(1744) 村掟の内容が再確認される 宝暦13年(1763) 北浦溜池(宝が池)の建設を願い出る 北浦新開溜池床地の年貢米を定める	村全体で 井堰・道普請 井堰上げ・送り火 を運営。
明治	明治 6年(1873) 松ヶ崎小学校 開校 明治42年(1909) 都立農林学校開校(現在の自動車教習所のあたり)	村では分家御法度な どの掟があり、これ を厳しく守っていた。 京都市に編入を機に 旧制度は廃止され、 その後人口は倍々に 増加する。
大正	大正 3年(1914) 松ヶ崎に初めて電灯がつく 大正15年(1926) 松ヶ崎信行幼稚園開園(後の松ヶ崎保育園) アメリカ人の宣教師が日曜学校を開く(後の聖光幼稚園)	「立正会」 旧慣例の事業を 引き継ぐ 1922~現在
昭和	昭和 2年(1927) 松ヶ崎浄水場完成 昭和 5年(1930) 京都高等工芸学校が松ヶ崎に移転 昭和 6年(1931) 上賀茂村・修学院村・松ヶ崎村が京都市に編入 昭和12年(1937) 日華事変勃発 昭和20年(1945) 終戦 昭和22年(1947) 農地改革 昭和24年(1949) 宝が池公園起工式 競輪場などが整備される 昭和25年(1950) 松ヶ崎で都市ガスが普及 昭和41年(1966) 国立京都国際会館 竣工 昭和52年(1977) 北山通り(宝が池通り-高野川間)の開通工事開始	
平成	平成 9年(1997) 地下鉄烏丸線 北山-国際会館間開業 国立京都国際会館でCOP3開催	

宝が池シンポジウム

宝が池の森の今・未来を考える

～人のかかわりが森の姿を創りだす～



参加費：無料

平成 25年1月13日(日)
午後1時~5時 (受付12時30分~)
京都府立大学 6号館ホール1

資料 2 暮らしと森のかかわり

松ヶ崎の山は、西から西山(妙の字)、林山、東山(法の字)、城山などを総称して虎の背山といいます。昔から松の木がたくさん生え、古墳群があり、虎の背山に沿ってお寺やお宮、民家が立ち並んでいます。妙法の送り火も西山と東山にあります。一番急な山を城山といって「天文法華の乱」の時などでは簡単な櫓をたてて見張りをしたといいます。村のどの家にも持ち山があり、正月三日が過ぎると、みんな「山行き」をして、木(松が多い)や柴を刈ってきて一年分の燃料を作りました。秋になるとよく松

茸が出ました。大正から昭和の戦前まで、山の上に網をはって下から追うという悠長な方法で兎狩りをしました。それでも毎年二、三羽は捕まえていたようです。虎の背山の北側を、狐坂(西)から、城山の裏(東)まで、口山、奥山、高山、エンショ庫などの山があります。小学校の体育の時間に裏山へ登って、宝池へ下りて一周して帰ってくると、ちょうど午後の五時間目と六時間目が終わるので、子どもたちは山登りを大変喜びました。

秋には、えのみやぐみ、むくやいわなしの実を採って食べたり、栗や椎の実を拾って食べました。昭和の終わりごろから「まつくいむし」が次々と松の木を枯らして、小学校にあった「御幸の松」も、昭和47年に枯れてしまいました。松がほとんど枯れてしまい、かわりにいるんな雑木が大きくなり、秋の山々が見事に紅葉するようになりました。こうして昔も今も、山は村人にとって生活そのものでありました。

春にはツツジやサクラ、冬には美しいオシドリが訪れ、都市公園として多くの人々に親しまれている宝が池公園。その森は、かつては私たちの暮らしに深く結びついた森でした。森の糧を暮らしに役立て、子どもたちはその中であそび、自然と共に生きる知恵や技術が、次世代へと引き継がれていました。そのしくみが途絶えて久しい現在、森の環境はナラ枯れやシカ害などにより急激に変化し、森の多様性が失われつつあります。森をよみがえらせるためには暮らしと森の関わりを再構築することが大切です。京(みやこ)を守り続けてきた森と人々が再び強く結ばれ、多様な命があふれる美しい森を未来へ引き継ぐ方法を、一緒に考えていきませんか？

主催 / (公財)京都市都市緑化協会・京都府立大学森林科学科

第1部

挨拶・趣旨説明 13:00～
話題提供 13:10～

宝が池の森のかつての姿から現状をたどる ～森の課題を知る～

江戸時代から現在までの森の変遷を、異なる視点からみつめていきます。徐々に変化する森林（シイ林化やソヨゴ林化）、近年のナラ枯れやシカ害などの急激な変化の実態と、そこに見る森全体の課題について知り、研究者の方々の見解を分かち合います。

話題提供

▶1▶ 江戸後期から昭和における宝が池周辺の森林の歴史

京都精華大学 小椋 純一

江戸後期から昭和における宝が池周辺の森林の状態、また森林と人との関わりについて、古絵図、古写真、旧版地形図、文献類、古老への聞き取りなどをとに考えることができる。その結果、たとえば江戸後期から明治期の頃など、その付近の森林には高木の樹木が少なかったこと、また森林の主要な樹木はマツであったことがわかる。一方、古老への聞き取りなどから、かつてその付近の森林では柴刈りのほか、マツ葉搔きなどが行われ、さかんに人々により利用されていたと考えられる。

●小椋 純一
京都精華大学(人文学部) 教授
文献類のほか古絵図、古写真、旧版地形図、あるいは土壌や泥炭中に含まれる微粒炭など、さまざまな史資料や試料をもとに植生景観の歴史について研究してきている。主な著書(単著)に『人と景観の歴史』(雄山閣出版)、『植生からよむ日本人の暮らし』(雄山閣出版)、『森と草原の歴史』(古今書院)。共著書、論文など多数。

話題提供

▶2▶ 宝が池周辺の森の移りかわりと将来の姿

京都府立大学 高原 光

京都盆地を取り囲む森林は、特に平安京が造営されて以来、人口の集中する地域として、人間活動の影響を強く受けてきました。本来の植生である照葉樹とスギ、ヒノキなど林からなる森林が、平安時代以降に、大きく変化しアカマツ林、高木の乏しい低木林あるは草原などへと変化してきました。1960年代の燃料革命以降、人と森林との関わりが希薄になり、植生遷移が進みますが、さらに、いわゆる松食い虫被害の蔓延によって、過去数十年間には、シイノキを中心とする常緑広葉樹が増加しています。そのような森の移り変わりとそのメカニズムを紹介します。

●高原 光
京都府立大学(生命環境科学研究科) 教授
京都府出身。花粉分析、微粒炭分析などの手法を用いて、シベリア、東アジアの植生史を研究。著書に『図説日本列島植生史』(共著、朝倉書店)、『生態学事典』(共著、共立出版)、『大台ヶ原の自然誌』(共著、東海大学出版会) など多数。

話題提供

▶3▶ 宝が池の森の植生とソヨゴ林の拡大

京都府立大学 長島 啓子

さまざまな問題に直面している宝が池の森。ソヨゴ林の拡大もその一つと言われています。また、現在生じているナラ枯れ後にソヨゴ林が拡大するのはと危惧されます。しかし、ソヨゴ林の分布状況や拡大の可能性を吟味した研究はありません。ソヨゴ林はどのくらい拡大しているのか？ナラ枯れ後に更に拡大するのか？「ソヨゴ林の拡大」からひもとく宝が池の森の現状と課題についてお話しします。

●長島 啓子
京都府立大学(生命環境科学研究科) 助教
神奈川県出身。森林生態・景観生態学の知見を応用した持続的な森林管理に関わる研究に取り組む。地理情報システム(GIS)・衛星画像を駆使するとともに、現地調査による現場の状況把握を重要視。研究のキーワード:森林計画、植生回復、森林再生、生物多様性。

話題提供

▶4▶ 宝が池の森で何が起きているのか？ ～ナラ枯れからひもとく・人と森とのかわり～

京都府立大学 小林 正秀

日本の農山村は、政治・経済に翻弄されてきました。燃料革命は燃料供給源としての農山村の地位を奪い去り、円高に伴う農林水産物の大量輸入は農山村の基幹産業の衰退をもたらしました。人は都会へと流れ残っている人もサラリーマンが増えました。人は土がなければ生きていけません、日本人はどンドン土から離れた生活をするようになったのです。農山村は、森林バイオマスなどの自然エネルギーの宝庫ですが、エネルギーのほとんどを海外や都会から購入しています。こうした暮らしの変化が、ナラ枯れだけでなく、マツ枯れや獣害、竹林の拡大などの異常事態をもたらしました。人々が再び木を使う暮らしを取り戻せば、森林被害が減るだけでなく、温室効果ガスの排出も削減できます。京都議定書が締結された国際会館に隣接する宝が池の森で、ナラ枯れとシカ害が起きているのは偶然とは思えません。現代人の知恵が試されているように感じます。

●小林正秀
京都府立大学特別講師、京都府森林技術センター主任研究員
京都府美山町出身。丹波栗、森林保護、森林経営など多分野を経験。現在は、特別講師として論文指導をしながら、ナラ枯れ防除に取り組む。著書に『樹の中の虫の不思議な生活』(共著、東海大学出版会)など。TV・新聞・雑誌で活動が取り上げられることが多く、森を賢く利用する必要性を訴えている。

第2部

話題提供 14:50～
座談会 15:45～
閉会挨拶 16:55～

宝が池の森の未来にむけて ～利用と管理を考える～

五山の送り火「妙・法」を抱き、地域の暮らしを支えてきた森。現代の暮らしの中で、人と森が共に成長できる森との関わり方とは？自然学習利用の現状の報告と共に、暮らしとつながる森のあり方を見つめ直し、健全な森を未来へ繋ぐ為の視点を探ります。

話題提供

▶5▶ 次世代へつなぐ身近な自然と暮らしのつながり ～自然学習の視点から～

(公財)京都市都市緑化協会 野田 奏栄

地域で引き継がれてきた自然とのつき合い方は、先人の経験と知恵の結晶です。一昔前の子どもたちは、遊びやお手伝いを通じて、その知恵や術を体験的に会得していました。しかし現在は、自然とのつきあい方を会得する機会が失われ、「里山」という言葉に集約し強く意識しなければその文化を引き継ぐことができなくなっています。“子どもの楽園”の運営の中では、「交わり」「循環」「季節」「つながり」「暮らし」の視点を大切に、“里山”体験を重ねています。自然の中での出会いから生まれる感動、驚き、好奇心が育くむ自然の変化に気づく感性。それが、現代人が失ってきた、自然への愛情と感性に基づく社会を取り戻すための礎になるのではないのでしょうか。

●野田 奏栄
公益財団法人 京都市都市緑化協会非常勤職員、公益社団法人 大阪自然環境保全協会・理事
大阪府出身。住宅設計、都市および緑地計画コンサルタント勤務を経て、フリーで活動。現在、緑化協会非常勤職員として宝が池プレイパークを運営。里山や川をフィールドに、自然環境に基づく地域らしさを再構築することをテーマに取り組みを続けている。

話題提供

▶6▶ 森に学ぶ楽しみ、森が示す地域の心

京都府立大学 田中 和博

森に学ぶ楽しさの本質は「狩り」にあります。紅葉狩り、キノコ狩りの「狩り」です。森の恵みは公平ではありません。経験に謙虚に学び、知恵や工夫を凝らした人にもたらされることが多いですが、いつもそうとは限りません。そこが面白いのです。一方、地域の人々の森に対する気持ちや考え方は、年月を経て、森の姿に表れます。宝が池の森とのつきあい方について、持続、循環、自立といったキーワードと順応的森林管理の視点から考えてみたいと思います。

●田中 和博
京都府立大学(生命環境科学研究科) 教授
兵庫県生まれの愛知県育ち。地理情報システム(GIS)を利用した総合的な地域森林計画について研究。著書に『古都の森を守り活かす』(共著、京都大学学術出版会)『森林計画学入門』(森林計画学会出版局)など。

グループ
トーク

座談会

これからの宝が池の森の姿をかたろう

- ①どんな森になってほしい？
- ②宝が池の森で何がしたい？
- ③自分たちでできることは・・・

参加者全員による自由な意見交換をおこないます。

